

リスク評価に基づく地震防災投資に関する研究

- その2 日本人の災害観から防災行動へ -

正会員 石川 孝重*1 同 伊村 則子*2
同 水越 薫*3 同 宮村 正光*4
同 石田 寛*5 同 倉田 成人*6
鳥澤 一晃*5

災害観 防災意識 意思決定
地震防災 防災投資 オーラルインタビュー

§ 1 はじめに

阪神・淡路大震災から7年が経過したが、社会の防災投資が進んでいるとはいえず、社会意識は薄れつつある。本報その1に述べたように、このような状況を鑑み、市民個々の地震防災投資に至る意思決定プロセスについて、災害観にまで立ち戻って分析することを試みた。本報その2では、災害観から防災行動に至る流れを整理した上で、その流れの現状把握と課題を抽出するべく実施したオーラルインタビューより災害観に着目して述べる。

§ 2 日本人の災害観

これまでの防災研究にかかわるなかで、発災時の被害軽減のためには、平時・災害時の行動を決める人間の意識が重要と考え、災害観に注目した。阪神・淡路大震災の状況分析も含め、日本人の災害観を文献^{1-3等})を参考に模式的に描いた図1を既に発表した⁴⁾。日本人には、宗教観や自然観をベースとした災害観が根底にあり、それが日常の防災意識を形成し、ある判断がなされ、防災行動へ結びつく。実社会で防災の実効を上げるには市民個々の災害観をふまえる必要がある。

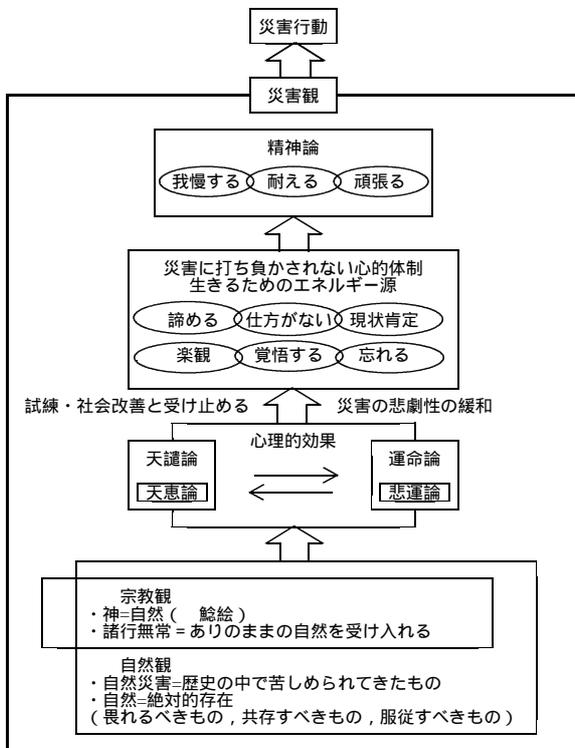


図1 日本人の災害観

§ 3 災害観から防災行動に至る流れ

先に述べた災害観はあるひとつの集団のなかでは普遍的で、ある時間ある時代のなかでは変わらないとしても、「防災意識」以降のステージで「動機付け」は可能である。

図1を研究者間でプレーストリーミングにより発展させ、図2

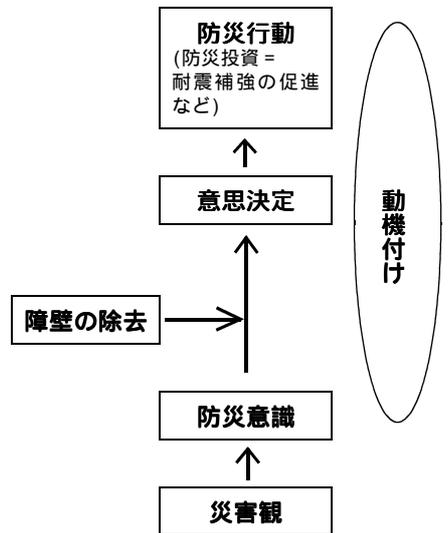


図2 災害観から防災行動に至る流れ 市民個々がどのように考え防災行動に至るのか、そのプロセスの分析と動機付けの促進を目指している。

防災行動に至る流れの根底として、個人としては余り有意識ではないが、日本人にある程度共通した災害に対する見方・考え方をもち、これを「災害観」とよぶ。これに基づいて、表に出てくるのは「防災意識」からで、災害体験や防災教育などによってその意識が大きく高揚されたり、あるいは風化したりする。次に、これを受けて最終的に防災行動をどのように起こすかという「意思決定」の段階があり、最終的には意思決定をして何らかの「防災行動」をとることになる。本研究では「防災投資」を念頭においている。

この防災行動に至る流れの中で、現実には防災意識がある程度あってもなかなかプラスの防災行動に結びつかない状況にあり、意思決定を阻害するいろいろな「障壁」があると考え、外的な「しかけ」として「障壁の除去」を取りあげた。この障壁の除去、あるいは軽減によって防災行動の意思決定が促進されるものと考えている。また、もう一方でこの流れの各段階に影響を与える「動機付け」があり、先に示した障壁を乗り越えさせるなどの効果をもつ。個人がもっている意識を教育によって高める、何らかのきっかけを与えて意思決定にもっていくなどのしかけが考えられる。

「障壁」と「動機付け」は対峙の関係にある。したが

って、「障壁の除去」あるいは「障壁の軽減」と「動機付け」は防災行動の促進に対して同じ効果をもつことになる。防災行動に至る意思決定を誘発させるための方法が「しかけ」であり、障壁の軽減や除去あるいは動機付けにプラス効果を与えるものである。本研究では、「動機付け」や「障壁の除去・軽減」に有効な「しかけ」を考え、防災投資の活性化を目指している。

市民個々の防災行動へ至るプロセスを、図2のように整理したが、それを基に防災に知見がある方々にオーラルインタビューを実施した。その発言記録の分析により、このプロセスをとりまく現状把握と課題の抽出を行った。

§4 オーラルインタビューの概要

防災に知見をもつ8名に対してオーラルインタビューを実施した。オーラルインタビューでは図2を提示した上で、それぞれの立場から同図のフローに示す市民、社会の状況についてかなり自由に述べてもらう方法を採用し、その発言記録の分析から図2中の「災害観」「防災意識」「意思決定」「防災行動」「動機づけ」「障壁の除去」の各項目ごとに整理し、現状分析を行った。オーラルインタビュー対象者の概要を表1に示す。

表1 オーラルインタビュー対象者の概要

	性別	年齢	市民の防災活動に関わるプロフィール
a	男	60代	建築技術者・住宅への免震装置販売
b	男	50代	保険関係
c	男	50代	自然災害を専門とする報道関係者・阪神・淡路大震災当時京阪神地域居住者
d	男	50代	土木技術者・防災関連担当・阪神・淡路大震災当時京阪神地域居住者
e	女	30代	阪神・淡路大震災当時京阪神地域居住者・被災者・元建設会社勤務・都市計画研究者・主婦
f	男	50代	保険関係・リスクコンサルティング
g	男	40代	自治体(県)防災担当者
h	男	40代	建築士・セキュリティー

本報では、オーラルインタビューより明らかになった災害観について以下にまとめる。

§5 オーラルインタビューより明らかになった災害観

日本人はこれまで自然との独特なつきあい方をしてきたことがわかる。例えば、「日本人は八百万の神の時代から、運命論的な点が非常にあり、同じような災害・事故が身近で起こっても自分には起こらないと考えている。また、起こってもそれは運命だと簡単に受け入れてしまう。西洋人のように自然を相手にそれを自分の力で変えていくという観点がない。自然を感謝しながら、危険も含めて自然の恵みを受け入れていく。どうしても対岸の火事ではないが、そういうふうに感じてしまうところがある(表1中hの発言。以下同じ)」。固有の自然観

をもっている。

その結果「火災保険などは個人の問題であるが、地震になると地域災害になるので、アンケートをすると、日本人の感覚では国とか誰かが何とかしてくれるという結果が出てくる。地震は起きないというより、起きてほしくないと思っており、さらに起きたらしょうがない、あきらめるといった感覚である(b)」。地震災害に対して自分で対策を立てる意識がもてない状況になる。「大きな災害になればなるほど、あきらめ観が全面に出てくる(f)」。

これは、「日本のリスク観・災害観は欧米と比べると独特であり、日本ではなかなかリスクマネジメントが普及しなかった(f)」ことにもつながる。「普及しなかったのは、欧米人に比べて日本人は分析的ではないからであり、それは宗教観から来ていると思う。何かあるとお祈りしてじっと待っている世界である。リスクを定量的に説明しても、定性的な説明(事例)を求められることが多い。また、欧米に比べて、情報公開することも遅れている(f)」。日本では、リスクの概念が未成熟である。「阪神・淡路大震災にあった時に、安全とか危険とかの感覚もなく生きていたというのが正直な感想である(e)」。日本人は、危機意識を意識しないで生活していることがわかる。

また、地震保険の加入率が低いことに対しても災害観が関わっており、「地震保険には個人はなかなか加入しないのが実状である。これはまさに日本人の災害観というべきだが、いろいろな保険の中で地震保険は受け止め方が少し違っている。火災保険や傷害保険、自動車保険などの通常の日常災害に対する保険は比較的抵抗なく加入する。これは、自分の過失とか隣から燃え移るというように、常日頃リスクを感じているからである。それに比べて、自然災害、特に地震のようなものは、自分の過失とは一切関係なく起こる。天災であり関係ない、むしろ来て欲しくないという気持ちになり、普段こないから保険料を払っても損する、もったいないという意識があって、なかなか入ってもらえないのが現状である(b)」。

§6 おわりに

日本人は固有の自然観をもち、運命論的な観点があり、大災害になればなるほどあきらめ観が全面に出ることがわかり、図1の災害観を改めて説明する結果を得た。【引用文献】

- 1) 総理府：世論調査平成7年12月調査社会意識に関する世論調査，内閣総理大臣官房広報室，1995年。
- 2) 廣井脩：新版 災害と日本人 巨大地震の社会心理，時事通信社，1995年4月1日。
- 3) 寺田寅彦：寺田寅彦全集第10巻（「災難雑考」，「震災日記より」，「日本人の自然観」），岩波書店，1961年7月7日。
- 4) 伊村則子：震災体験の継承，日本建築学会第4回地震防災シンポジウム「阪神・淡路大震災が問いかける都市防災システムの課題」資料，pp.67～70，1997年11月20日。

*1 日本女子大学住居学科 教授・工博

*2 武蔵野女子大学短期大学部生活創造デザイン学科 専任講師・博士(学術)

*3 鹿島建設技術研究所・工博

*4 鹿島建設小堀研究室・工博

*5 鹿島建設技術研究所・工修

*6 鹿島建設小堀研究室・博士(工学)

*1 Prof., Dept. of Housing and Architecture, Japan Women's Univ., Dr. Eng.

*2 Lecturer, Dept. of Creative Design for Living, Musashino Women's Junior College, Ph. D.

*3 Kajima Technical Research Institute, Dr. Eng.

*4 Kobori Research Complex, Kajima Corporation, Dr. Eng.

*5 Kajima Technical Research Institute, M. Eng.

*6 Kobori Research Complex, Kajima Corporation, Dr. Eng.